

いじめ後日談～廃校の屋上で交わす最後の淫らな和解～

目次

1. 第1話: 回想の階段
2. 第2話: 屋上の対峙
3. 第3話: 互いの傷
4. 第4話: 力ずくの和解
5. 第5話: 逆転の瞬間
6. 第6話: 一度きりの終わり

第1話: 回想の階段

階段を上る。一段、また一段。

古い廃校の階段は、俺の足音を吸い込んでいく。誰もいない建物の中で、音は妙に遠くへ逃げていく。コンクリートの壁に染みついた匂いが鼻をつく。カビと、埃と、何年も前の生徒たちの汗と。

ポケットの中で携帯が震えた。三時間前の着信だ。

『屋上で待ってる』

蒼太からのメールは、それだけだった。

指先で画面を撫でる。返信はしていない。する必要もない。俺はこうして、約束の場所へ向かっている。

なぜ来たのか。自分でもよくわからない。

ただ、来なければならない気がした。

三階の踊り場で、窓から差し込む光が床に長方形を描いている。

埃が光の中で舞っている。ゆっくりと、まるで時間が止まっているかのように。

俺は立ち止まり、その光を見つめた。

一年前のことを思い出す。

——あの日も、こんな光だった。

体育館の裏。昼休みの終わり。蒼太と、他に二人。

「おい、權」

声をかけられた瞬間、背中を押された。壁に手をついて体を支える。振り返る間もなく、腕を掴まれた。

「なんだよ、急に……」

言葉が途切れる。蒼太の顔が、妙に近い。

「別に。ただ、ちょっと遊ぼうと思って」

笑っていた。楽しそうに。

俺の制服のボタンに手がかかる。

「やめろよ」

抵抗しようとした。けれど、他の二人が両脇から腕を押さえる。動けない。

シャツの前が開かれていく。

「なに、恥ずかしがってんの？ 男同士だろ」

蒼太の指が、俺の胸に触れた。

——それから先の記憶は、断片的だ。

乳首を摘まれた感触。

ズボンを下ろされる恐怖。

勃起していることを指摘され、笑われた屈辱。

「意外とデカイじゃん」

「感じてんじゃねえの？」

「キモ」

声が重なり、渦を巻く。

誰かの手が、俺のペニスを握った。

動かされる。上下に。

「やめ——」

声が出ない。喉が締め付けられたように。

快感と、嫌悪と、恐怖が混ざり合う。

どれくらい経ったのか。

気がつけば、俺は射精していた。

制服が汚れた。

笑い声が響いた。

あの日の匂いを、俺は今でも覚えている。

蒼太の汗の匂い。制汗剤の、爽やかな香りの下に隠された、生々しい男の匂い。

それが、俺の鼻の奥にこびりついて離れない。

四階。

階段の手すりに手を置く。冷たい金属の感触。

視線を上げると、屋上へ続く最後の階段が見える。

ドアは、少しだけ開いている。

あれから、蒼太とはほとんど話していない。

卒業後、それぞれ別の道を歩んだ。俺は専門学校へ。蒼太は就職したと聞いた。

たまに街ですれ違う。目が合う。

蒼太は、いつも何か言いたげな顔をする。

けれど、俺は視線を逸らす。

何も言わない。言えない。

それなのに、今日、メールが来た。

『話がある。屋上で待ってる』

どの屋上だ、とは聞かなかった。

わかっていた。ここしかない。

俺たちが通っていた高校は、三年前に廃校になった。生徒数の減少で。

取り壊しの予定もあるらしいが、まだ建物は残っている。

侵入禁止の看板が立っているが、フェンスには穴が開いている。

誰でも入れる。

なぜ、ここなのか。

なぜ、今なのか。

考えても答えは出ない。

階段を、また一段上る。

足が重い。

けれど、止まらない。

——あの日から、俺は変わった。

人を信じられなくなった。

触れられることが怖くなった。

誰かと親しくなることを、避けるようになった。

友達はいない。

恋人も、いない。

一人でいる方が楽だ。

誰にも傷つけられない。

けれど、時々、思う。

このまま一生、一人で生きていくのか、と。

それは、生きていると言えるのか、と。

屋上へのドアの前に立つ。

ドアは半開きのまま、風に揺れている。

向こう側から、風が流れ込んでくる。

草の匂い。

そして、あの匂い。

蒼太の匂い。

息を吸う。深く。

吐く。

手を、ドアに置く。

押す。

ドアが開く。

眩しい光が、俺の顔を照らす。

目を細める。

屋上の中央に、人影が見えた。

蒼太だ。

背を向けて、フェンスにもたれている。

風が、彼の髪を揺らしている。

黒い髪。短く刈り上げられた、清潔感のある髪型。

一年前と、変わらない。

足音に気づいたのか、蒼太が振り返る。

目が合う。

「来たんだな」

声が聞こえる。低く、落ち着いた声。

一年前と、少し違う。

あの頃は、もっと軽い口調だった。

今の蒼太の声は、何かを押し殺しているような、重さがある。

俺は何も言わない。

ただ、ドアを閉める。

音が、静かに響く。

蒼太が、こちらへ歩いてくる。

距離が縮まる。

三メートル。

二メートル。

一メートル。

止まる。

互いの顔を、見つめ合う。

蒼太の目は、真っ直ぐ俺を見ている。

逸らさない。

その目の奥に、何があるのか。

俺には、わからない。

「久しぶり」

蒼太が、口を開く。

「.....ああ」

俺は、短く答える。

沈黙。

風だけが、音を立てる。

「なんで、俺を呼んだ」

俺は、聞いた。

蒼太は、少し考えるように視線を落とし、それから、また顔を上げる。

「話したいことがある」

「話？」

「ああ」

また、沈黙。

蒼太の手が、動く。

ポケットに入れていた手を、出す。

そして、俺の肩に、そっと触れた。

体が、強張る。

「.....触るな」

声が、震えた。

自分でも驚くほど。

蒼太の手が、止まる。

けれど、離れない。

「怖いか」

蒼太が、囁くように言う。

「.....」

答えられない。

怖い。

怖くないわけがない。

あの日の記憶が、蘇る。

体が、記憶している。

触れられることの、恐怖を。

けれど。

蒼太の手は、あの日とは違う。

優しい。

まるで、壊れ物に触れるような。

「俺は、お前を傷つけた」

蒼太の声が、続く。

「あの日のこと、忘れられないだろう」

「.....」

「俺も、忘れられない」

その言葉に、俺は顔を上げる。

蒼太の顔を、見る。

彼の目が、潤んでいる。

涙？

まさか。

「俺は、ずっと後悔してた」

蒼太の声が、震える。

「あの日から、お前の顔が頭から離れない」

「あの時のお前の、目が」

「怯えた、目が」

蒼太の手が、俺の肩を強く掴む。

「許してくれとは、言わない」

「ただ、伝えなかった」

「俺は、お前を傷つけたことを、後悔してる」

言葉が、俺の中に落ちてくる。

重い。

どう受け止めればいいのか、わからない。

「.....それだけか」

俺は、やっとの思いで、声を絞り出す。

「それだけ言うために、俺をここに呼んだのか」

蒼太は、首を横に振る。

「違う」

「もう一つ、ある」

彼の手が、俺の頬に触れる。

温かい。

「俺の、傷も見してほしい」

「.....傷？」

蒼太は、自分のシャツのボタンを外し始める。

一つ、二つ、三つ。

胸が露わになる。

そこに、傷跡があった。

古い傷。

何本も。

誰かに、刃物で切りつけられたような。

「これは.....」

俺の声が、途切れる。

「俺も、誰かに傷つけられた」

蒼太が、静かに言う。

「お前を傷つける前に」

「そして、お前を傷つけた後にも」

「暴力の連鎖の中で、俺も傷ついてた」

彼の目が、俺を見つめる。

「だから、許してくれとは言わない」

「ただ、知ってほしかった」

「俺も、お前と同じだって」

風が、吹く。

蒼太のシャツが、はためく。

傷跡が、光の中で浮かび上がる。

俺は、その傷を見つめる。

手を、伸ばす。

触れようとして、止まる。

「.....触っていいのか」

蒼太は、頷く。

「ああ」

俺の指先が、彼の傷に触れる。

硬い。

古い傷は、固く盛り上がっている。

蒼太の体が、微かに震える。

「痛いか」

「いや」

彼は、首を横に振る。

「ただ、久しぶりに、誰かに触れられた」

その言葉に、俺は手を止める。

「.....お前も、か」

蒼太が、小さく笑う。

「ああ」

「俺も、誰にも触れられなかった」

「怖かったから」

彼の手が、俺の手に重なる。

「でも、今日、お前に会って」

「思った」

「もう一度、触れてみたい、って」

彼の顔が、近づく。

俺の心臓が、激しく跳ねる。

「.....何を、するつもりだ」

蒼太の目が、俺を捉える。

「お前が、嫌じゃなければ」

「俺と、もう一度、触れ合ってほしい」

「今度は、傷つけ合うんじゃない」

「癒し合うために」

彼の言葉が、俺の中に染み込む。

癒し合う。

それは、可能なのか。

俺たちに。

けれど。

蒼太の目を見つめていると、何かが揺らぐ。

胸の奥で、凝り固まっていた何かが。

「.....一度きりだ」

俺は、言った。

「これが終わったら、二度と会わない」

蒼太は、頷く。

「わかってる」

「これは、終わりのための、儀式だ」

彼の手が、俺の腰に回る。

引き寄せられる。

体が、密着する。

蒼太の匂いが、鼻腔を満たす。

汗と、制汗剤と。

あの日と、同じ匂い。

けれど、今は。

怖くない。

不思議と。

蒼太の唇が、俺の首筋に触れる。